かない。木賃宿を起点に何とか職探しである。

神戸駅の近くの職安で一週間、朝から夕方まで仕事探し。それも条件付きで住み込みの所を頼み込んだ。一週間目である、トラックの運転手の口がある。「どうします?」と職安の職員から言われ、すがる思いで頼み込んだ。「住み込みだが一つ条件が有ります。月給一〇〇〇円だが保証人をつけること」と言われ「私は鹿児島から出てきて神戸には誰もおりませんが、何とか先方さんに職安のお力でお願いして頂けませんか」と懇願する。「仕事の上で間に合わないようでしたら、すぐでも辞めさせてもらっても文句は言いません、誓約致します」と話をしていると、中から所長か課長かというタイプの人が出て来て「私は宮崎の都城です、ここの所長です。先程より話を聞いていると他人事とは思われない。貴方は真面目そうだし、お困りだろうから、貴方という人物を信用して、私が保証人になってあげる」と言ってくださり、どうしようかと思案し迷っていた矢先、地獄で仏に会ったよう、世の中は助ける神もいるんだと思った。

## 船舶部隊の戦陣回想

愛知県　權田梅芳

昭和十七（一九四二）年徴兵検査、第二乙種合格。

昔から師範学校卒業は全員五ヵ月入隊。伍長で除隊し国民兵となり、戦争でも召集がなく、少国民教育に専念した。この時期に、永年にわたってアジア諸国を植民地にして搾取してきた欧米列強は、アジア人のアジア建設を主導する日本を封じ込めるため、我が国を経済封鎖し、石油・ゴム・鉄鋼石を禁輸して戦いを挑んで来た。存亡の危機に日本も止むなく臨戦体制をとり、師範卒も、私ども十五年卒から普通兵となった。

同期生や村の若者が次々入隊し、切歯扼腕するうち七月に召集令状が届いた。長男だからと出征免除の師範へ進ませた周囲の願いもくまず、これで俺も一人前か、と単純に感激し、鯖江歩兵第一三六連隊に入隊した。

勇名轟く脇坂部隊の原隊で訓練は猛烈、内務も厳正。「お前らは補充兵、一銭五厘の消耗品じゃ」と、ハッキリ引導を渡され、徹底的にしごかれ鍊えぬかれた。

入隊五カ月後、班長さんから幹候志願を勧められ、数日後、急に連隊本部服務となり、演習から解放された。人事係の准尉さんが、「これは中隊幹部のご配慮だ、頑張れよ」と煽る。地獄とも言われる軍隊にも、いつもどこかで温情が通っていることに気付いた。

ところが、一月早々、私ども二百五十人だけ中支の第五揚陸隊に転属、船舶兵に転科となり、また新規まき直しの新兵さんである。海路、上海に到着した。舟艇に乗り組む揚陸作業と機動輸送専門の新設部隊である。時期は酷寒、手旗・モールス訓練、舟艇整備、期間整備—分解結合調整、舟艇の操縦運行、砂浜・桟橋の達着訓練等に加えて、繋船場の舟艇監視など訓練は多岐で厳しかった。

船舶工兵連隊・揚陸隊の主兵器は大・小の発動艇。大発は全長十四・八メートル、全幅三・四メートル、吃水は満船時〇・七メートルと小型だが、積載能力（武装兵七十人または中戦車一両、物資等十二トン）は大きく、凌波性の優れた船体となっている。六十馬力重油機関を搭載、鋼板製で信頼性が高く、使いやすいなどの特徴を持っているが、最高九ノットと速度は遅く、船側・船底ともに二ミリ鋼板一枚張りで直撃弾に弱いのが泣き所であった。中国各地・マレー・比島、その他上陸戦で活躍していた。

基礎訓練終了の頃は、みんな赤胴色の荒くれ男に変身した。板子一枚下は地獄、ラッパズボンにゴム底足袋で三十三センチ幅の舷側の上を走り回っての揚陸作業で、胸には錨と星の胸章が輝く。

五月～六月、宜南作戦に参加し、揚子江を遡って宜昌・長沙に出動した。幹候では第一次選抜となった。

七月二十七日、第五揚陸隊は南方派遣。高雄・マニラ経由セブ島タリサイに移駐、新品の大発六十隻が到着した。そこで熱地訓練や幹候第二次選抜などがあった。

豪北戦線突入命令で十一月六日セブ発、十五日、西

北ニューギニア、マノクワリに上陸、直ちに勢第一号作戦に参加した。以後、惨烈を極めたビアク、ヌンボルからソロに至る長大な戦線で悪戦苦闘、累次の出動と激戦、病魔と飢餓の為に半数を超す戦友を失ってしまった。

運命の不思議か、私ども甲幹五人は、セブ発の輸送船中で船舶練習部へ分遣を命ぜられ、卒業後に再び原隊に復帰することを期して回れ右となった。便船を探してセブ―マニラ―高雄と乗り継いで、翌年一月半ば、宇品に到着し船舶練習部に入部した。そこを八月に卒業、豪北は既に米軍制圧下にあって原隊への復帰がかなわず、われわれは比島・北方等へ分散して転属となり、私は小松島教育隊を経て再び大陸へ行った。

四月、香川県豊浜に移駐し、八月十五日卒業となった。御前講演は先に七月末に指定されており、すでに準備は完了していた。当日、朝食後隊長室に呼ばれ、練習部長馬場少将から恩賜賞授与の内示を受ける。思いがけない事で身体中に電流が走る思いで夢かと惑った。

驚きがもう一つ、隊長室に何と、祖母と父とがチョコンと座っているではないか！　豊橋連隊区司令部から二等切符を頂いたという。そして父から、ご祈とうをこめた軍刀を渡された。

卒業式は営庭に全隊員千八百人が整列し、陛下ご名代の宮殿下をお迎えして挙行され、船舶司令官鈴木大将から恩賜品を拝受した。式後、講堂で東部ニューギニア戦線で成功を収めた逆上陸の戦訓に基づき二十分間口述して講演を終わった。

九～十一月は、徳島県小松島教育隊で初年兵教育に従事した。

翌年一月に特設船舶工兵第三十三連隊が新設され、私は第一中隊第一小隊長を拝命した。連隊には各地補充隊から編成要員が続々集結した。我が隊には幸運にも、三ヵ月間手塩にかけた懐かしい顔がそっくり来ている。その後の前線で、人間味あふれる但馬中隊長のもと、股肱とも頼む気心ッ！カーの下士官兵諸君と生死を共にし得たのは幸せであった。

一月二十日、緊急出戦命令で中支へ派遣となった。

釜山―上海間は兵員・大発を列車輸送し、二月二日、昭和島に着いた。丸二年前の兵舎に着き感慨を新たにした。

三月二日、第一中隊は蘇州に分遣となり、大発十七隻で蘇州河を遡り海軍砲艇隊兵舎に同居することになった。任務は上海―南京―杭州と結ぶ江南三角地帯の水路確保・兵員器材の輸送である。

中旬、我が小隊は大発二隻で、音楽家服部良一氏一行を乗せて十日間ほど太湖周辺の宣撫工作に当たった。この網の目のようなクリークと湖沼の介石一帯は江南第一の穀倉地帯で、我が軍と維新政府軍、蔣軍、共産軍との三つ巴の戦場であった。それぞれ各軍の占拠する点と線が複雑に交錯し、しかもそれが猫の目のように変わり厄介至極である。その上、民衆さえ強い者には従順だが、弱いと見れば牙をむく有り様で、全く四六時中油断できない。

隊は一部を両岸に上げて警戒、橋は確保してから艇を通す。夜間は歩哨も立て、お客様に万一の事のないよう神経をすり減らす有り様だった。

四月、連隊本部付に転じ作戦室勤務となった。極秘で東シナ海沿岸の海図・水路誌・潮汐表等と首っぴきで、綿密な行動計画の立案、策定と、それらのガリ版印刷に当たった。甌江下流地区に孤立する温州支隊梨岡兵団一万三千の撤収支援と、保有する重火器等の寧波までの海上輸送作戦で、これには連隊主力と大発二十五隻を投入した。

行動基準は、敵機・艦艇の活動鈍る雨期実施、千余の島の中に秘匿仮泊基地六ヵ所を設け警備隊配置、行動は艇隊単位で必ず夜間航行、昼間は偽装秘匿、大発は漁船等に偽装、艇隊毎に高射機銃・五十七ミリ速射砲各一門を装備、などであった。

四月二十九日作戦開始。先発艇隊は大発四隻で計画通り基地を設定して南進、三隻の後続各艇隊も逐次南下した。折しも低気圧停滞で風波激しく難航を極めるが、敵の出撃もない。本部は甌江江口沖合の泗門島に最終基地を設けて江口北岸の黄華村に上陸、各艇隊も順次泗門島に到着し、各艇を分散して偽装秘匿して待機した。

作戦室と兵団司令部の打ち合わせが進み、両者は緊密な連携下に大々的に温州増強の陽動作戦を展開し四十カイリ上流の温州市街へ舟艇の往返が急増した。その実、頻繁に夜間陣地移動する火砲は一門また一門と泗門島に運び、荷直しと厳重な固縛の上、屋根を葺き、艇隊ごとに帰航。六月末までに野戦重砲・野砲・高射砲に牽引車等の重車両、軍需物資から傷病兵、民間人まで運んで作戦地に集結した。兵団は山砲以下の軽火器で敵中を突破し、七月杭州に集結完了した。

黄華村で金沢の城所正一郎君とバッタリ出会う。数日後、兵団主計将校であった彼の要請で、連隊は所在部隊の食糧調達に大発を出した。翌日帰着した彼は「救援出動のお礼です」と、珍果「龍眼」を山ほどくれた。みんな大喜びであった。

帰航の途中、敵機の襲撃を逃れて狭い入江につっこんだ大発が、暗礁にのりあげて擱坐沈没したとの無線連絡が入った。本部艇も出向いて手を尽くしてみたが、結局、野砲諸共見捨てることになった。砲兵みんな砲にしがみついて離れない。船舶工兵の兵が無理やり次々引き上げる。砲兵は「歩兵には軍旗があるが、砲兵には砲だけだ。砲が沈めば我々も沈む」と号泣し、船舶兵ももらい泣きをした。

嵐の翌朝、我々最終艇隊は基地まで行けず、とある入江で秘匿作業中に敵襲があり、無断で周囲の崖を越えた兵二人が敵に襲われて一人が負傷、拉致されたとのこと。この入江では袋のネズミ、外洋へ出れば米機の餌食となる。苦肉の策で、まず、大発装備の砲で周りの敵を圧倒し、その間に重機を高台に上げて撃ちまくり、夕刻脱出した。

翌朝、艇隊は近くの海軍基地に寄港、特務機関に捕虜交換の交渉を頼んだ。夜更けに通報があり、私が連絡に赴く。拳銃片手に着剣の伝令と二人で迷路のような無人の路地をたどった。港までの帰路の何と遠かったことか。

温州から帰ると、上海は既に米機の空襲下にあった。船舶司令部の作命で連隊は海上挺進三個戦隊を編成し太湖で訓練を開始した。特攻隊である。

私は崇明島から九江まで出動中の各中隊との連絡に

当たる。ある夜、無錫で挺隊と連絡後、クリークの艇に戻る途中、城壁の下で鋭い「誰何」の一声があった。維新政府軍の歩哨である。私は月光を浴びて丸見え、相手は真っ暗、とっさの事で「日本兵」が出ない。次の「誰何、誰何、パン」で万事休す、「友軍に撃たれるとは、ああ情けない、犬死にだ」などと一瞬のうちに考える。急に相手が月の中に出て敬礼する。こちらの逃げ隠れもしない態度（実は動けなかった）で先方は友軍と認めたらしく、命拾いをした。

そして八月十五日終戦、負けていないのに降伏とは……。かくてわが国は敗者の裁判を受けた。

古今東西を問わず、歴史はいつも勝者の手で書かれた。しかし、歴史は古くなるほど新しくなる、とも言われる。つまり、勝てば官軍式に当初曲げられた歴史も、しかるべき歳月を経て真実が洗い出され、修正されるのである。

# 戦争と食糧

愛知県　松井信一

私は戦争中の都市の大空襲など、その激しさや悲惨さは、その当時は軍隊に居たので少しは耳にしていたが、直接経験していない。また、軍隊に居たと言っても内地勤務だったので、生命を懸けた戦いの激しさ、苦しさなどもわからない。従って私は、戦場でも銃後の国民の生活上も、無くてはならない食糧について考えてみることにした。何にしても五十余年前のことであり、年とともに薄れてゆく記憶をたどりつつ書いてみた。確証は無く、記憶違いであるかもしれない。また、書いたことは断片的であり、まとまりもなく、意味のないものであるかもわからない。

昭和の初め私は小学生だった。その頃の農家の生活は大変貧しく、毎日のくらしは全くお粗末なものだっ